
Ring of Fortune

曲楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ring of Fortune

【Nコード】

N7878Y

【作者名】

曲楽

【あらすじ】

自分の望む世界を映し出す鏡。
わたしの望む世界ってなんだろう。
期待に胸を膨らませながら、わたしはその鏡の中に一步を踏み出した。

「ようこそ、ミルス・クレア魔法院へ。」
幸運を導く指輪と共に。

(ワンドオブフォーチュンの二次創作です。)

一度二次創作を書いてみたいという思いと、ワンドへの強すぎる愛でやってしまいました。

文才0の作者がはじめて書く二次創作です。

主人公であるオリキャラが、ワンドの世界をメチャクチャにする可能性があります。

また、作者はワンドの世界の魔法の仕組みとか、あまりよくわかっていない可能性があります。

しかも、原作うる覚えなのに確認もせず無理矢理書きすすめる場合もあります。

イメージが崩れるのが嫌な方は、今すぐお戻りください。

無印、FD、2のネタバレいっぱいです。ご注意ください。

ちなみに、作者はアルバロを愛しています。エストとソロも大好きです。たぶん鼻肩します。ごめんなさい。

以上の点が大丈夫だという方のみ、どうぞお読みください。)

退屈な世界から抜け出す鏡

「爆発すればいいのに。」

「なにが？」

「学校。」

「は。」

「だって暇なんだもん。」

暇。

暇だ、本当に。

退屈すぎる。

いっそ、学校でも爆発すればいいのに。

・・・自分から仕掛ける気にはなれないけど。

「閉鎖空間に行きたい・・・神人でも出てきてこんな学校壊してくれればいいのに・・・。」

「ちょ、絵有えあり？」

「SOS団に入りたい・・・わたし、異世界人として乗り込むわ！
！」

「あ・・・最近またハルヒ読んでしょ？」

「ん・・・まあ・・・星奏学院でトロンボーン吹いてくる・・・」

「ええと・・・それはなんの話？」

「黒主学園に転入したい！。川中島の戦いで道鬼斎につかまってる！。」

「ちよつと待って、ついていけない。なんの話??？」

「彩江あやえちゃんは知らないと思うよ。少女マンガとか女性向けゲームとか興味ないでしょ。」

どこかへ行きたい。

もっと楽しいところ。

もっと楽しい世界。

ここじゃない世界。

非現実的な世界。

「うん。……ていうか、二次元に依存しすぎじゃない？」

「いいの。……彩江ちゃん、部活は？」

「それはこっちのセリフなんだけど。文芸部は今日休み。」

「あー……いいよねえ、お休みいっぱい。わたしも文芸部に転部しようかなあ。……そのうちSOS団になるかもしれないし。」

「いや、ならないから。ていうか絵有、ほんと部活いいの？」

「んー……やめちゃおっかなあ、吹奏楽。」

「えええええ」

「だって、ほとんど休まないし。土日も祝日も一日練習だし。平日だって8時から朝練で、授業終わったら夜の8時まで練習あるし。

やりたいこと全然できないっていうか、そこまでしてトロンボーン吹きたくないっていうか、先生はかなり厳しいけどそれももう飽きたっていうか……。」

「先生の厳しさが飽きたってなんなの。」

「いや、なんかもう怖くなくなっちゃったっていうか、あーはいはい、としか思えないんだよね。怒られても。」

「絵有……。」

飽きた。

飽きた飽きた飽きた。

部活も、この学校も。

退屈。

ほんとに退屈。

「こんなところでさぼってる時点でもう退部決定だよ。先生厳しいし。部長さんも厳しいし。」

「いやいやいやいや、なに言ってるの。」

「あー……そろそろ教室から出ていくべきかな。週番さん困ってる。」

「……ほんとだ。鍵閉めたいっぱいね。」

「うん。行くところ。ごめん、話につきあわせて。」

「べつにわたしはいいけど、・・・部活、本気で行かないの?」

「わかんない。・・・どうしよう。」

わたしたちは教室から出て、廊下からずっとこちらの様子を窺っていたらしい週番さんに謝る。

「そうだ、彩江ちゃん。わたし、あの鏡に行ってくるよ。」

「あの鏡?なにそれ。どの鏡。」

「このまえ貸してくれた部詩に書いてあったじゃん。たしか、一昨年くらいのやつ。」

「あー・・・教育塔の2階から3階にあがる階段の踊り場の鏡?」

「そう。それ。」

一昨年の3年生の文芸部員が書いた小説にあった。

その鏡は、自分の望む世界を映し出す。

「あの小説、なかなかメチャクチャな設定だったよね。・・・たしか、主人公はその鏡から異世界に行っちゃうっていうファンタジーものだったよね?」

「そう。わたしもちよっくらファンタジーな異世界に行ってくるよ。」

「えええっ、部活はどうするの。」

「そのあと考える。・・・彩江ちゃん、そろそろバスの時間ですよ。」

「あ、ほんと。じゃあ、わたし行くわ。・・・部活、ちゃんと行きなよ?」

「えー・・・怒られる・・・。」

「行きなよ!??」

「・・・気が向いたらね。」

わたしの望む世界ってなんだろう。

・・・二次元の中だったら、どの世界が一番いいだろうか。

「やっぱり、今のマイブームはあれよね。」

中学時代の友だちが貸してくれて、すっかりはまってしまった。どうしても自分用が欲しくて買い、FDも買い、最近発売された新作も買ってしまった。

女性向け恋愛シミュレーションゲーム。

「ミルス・クレアに入学したい……。」

本当に好きだ。

愛してしまっている。

「アルバロが好きだ。禿げる禿げるー。」

大好き。性格最悪な彼が。

現実にはたらきとありえないと思うけど、二次元なら許せる。

本当に大好き。何度殺されかかっても……実際に殺されても、それでも好きだ。

「……廊下歩いてる途中に顧問の先生に会ったらどうしよう。」

途中まで歩いてきて気づいた。

そういえば、教育塔の階段に行くまでにはどうしても職員室の前を通る。

「……大丈夫だね。きっと部活のほうに行ってるよね。」

とはいっても不安だ。

職員室は教育塔の1階。

わたしは教育塔に入り、廊下に誰もいないことを確認すると、そのままダツシュした。

そして階段を駆け上る。

「……着いたっ……。」

ダメだ。疲れた。

自分、体力なさすぎる。

さすが、十段階評価で体育に3を買っているだけはある。

「……はあっ、これが、例の鏡。」

自分の望む世界なんて、映っているはずない。

そんなことわかっていた。

移動教室とかで何度もこの鏡の前を通ったことはあるが、いつ見てもこの鏡は普通の鏡だった。

あたりまえだ。所詮、生徒が書いた小説の中の話にすぎないのだから。

・・・そのはず、だったのだが・・・。

「あれ・・・こんな鏡だったっけ・・・。」

どこの学校にでもあるような、普通の鏡。

なんの装飾もされていない、等身大のただ鏡・・・だったはず。

「こんな鏡・・・じゃない。」

そこにあつたのは、まるで学校の風景に合わない鏡。

独特な雰囲気を持った鏡。

「でも・・・この鏡、見覚えがある。」

こんな鏡、違う。

でも、見覚えはある。

「新聞部の部室・・・？違う、食堂・・・え・・・。」

ありえない。

でも、たしかこんな鏡だった。

「うそ・・・でしょ。」

わたしはそつと鏡に触れようとした。

「・・・！！？」

触れられない。

鏡の表面の、冷たい光沢は見えているのに。

その表面を手で触れることができない。

「これ・・・入れるってこと・・・？鏡の中に・・・？」

鏡の表面に触れようとした手は、なにに触れることもなく、すつと鏡の中に溶ける。

・・・なにかの怪談のようだ。

でも、すごく面白い。

「入るしかないでしょう。」
「入るしかない。」

こんな非現実的なこと、見逃してどうする。

わたしはずっと、それを待っていたのだから。

「どこへ……つながっているのかな。」
わからない。

でも、すごく楽しみだ。

「わたしの望む世界？……本当に？」

入ってみなければわからない。

だから、入ろう。

「……きつと、帰ってこれるわよね。……ズツに、帰って

これなくてもいいか。」

そこが、本当にわたしの望む世界なら。

そしてわたしは、その世界に一步を踏み出した。

よづこぞ、ミルス・クレアへ

「ん……。」

揺れる。

揺れる、揺れる、揺れる。

「っ……なに……?」

あまりの揺れに、わたしは目を開いた。

「……………!!」

その瞬間、目の前に広がったのは、『絵』。

「なに……これ……。」

妙に立体感のある絵。

「……意味がわからない。」

平面なのに立体。立体なのに平面。

まるで、二次元の世界に入り込んでしまったかのような

思わず立ち上がり、目の前にある空間へと手を伸ばす。

「あ……ちゃんと奥行きはある……絵なのに。って、」

わたしは、伸ばした自身の手に目をむける。

しわ一つない、綺麗な手。

二次元の手だ。

「すごいすごい……!意味がわからないっ。これは夢??わっ」

大きな揺れにおそわれ、体が傾く。

そのとき、体にまとっている布が揺れた。

「なにこれ……マント……?」

黒いマント。裏地はオレンジ。

「うそ……これって……」

左胸のあたりには、メダルのようなものがついている。

「これ、ミルク・クレアの……!」

間違いない。わたしが着ている服は、ミルス・クレアの制服だ。

「なんで???すごいっ、わたし、ミルス・クレアの制服着てるっ
・どうして・・・?っとうわっ」

再び、大きな揺れにおそわれ、わたしは思わず今まで座っていたらしいイスに座りなおした。

「ここは・・・どこなんだろう。なにかの乗り物みたいだけど。・
・この浮遊感、空を飛んでる・・・?」

壁側に窓を見つけ、のぞいてみる。
するとそこは

「ラティウム!!」

上空から見たラティウム。

ゲームの画面で何度か見た景色だ。

「もしかして、わたしが乗っているのって、ドラカーゴ?」

ここがワンドの世界だとするのなら、おそらくそうなのだろう。

「乗客は、・・・他にはいないみたい。」

再び窓をのぞけば、景色はどんどん近くなっていた。

もうすぐ着陸するのだろう。

「これは夢・・・なのかな・・・。」

記憶を探ってみる。

なんだかゴチャゴチャしている頭の中から、一番最近の記憶を引っ張り出す。

なんとなく部活に行く気がおきなくて、教室で彩江ちゃんとしゃべって、その後

「鏡・・・わたし、本当に鏡を通ったのかな・・・。」

もしこれを夢だとするのなら、あの鏡を見たことも夢だ。

わたしはまだ教室にいて、そこで眠ってしまったのだろう。でも、これが、夢ではないのなら

「そんなことありえないけど、でも・・・。」

ここは、わたしの望む世界

もしそうなのだとしたら、

「楽しまなきや．．．!!」

楽しむしかない。

もし夢なのだとしても、

ここが、わたしの望んだ世界なら。

そのために、わたしは鏡を通ったのだから。

「発着場．．．たしかに、ゲームで見たのもこんな感じだったかも．．．。」

わたしが乗ってきたドラカーゴの乗客はわたし1人だったが、他のドラカーゴにはたくさんの人たちが出入りしている。

「．．．．アルバロが、ルルにプレゼントをわたした場所．．．。」

たしか、『綺麗なシヨール』だったはず。

「．．．全部アルバロ関連で考えてしまう．．．。」
でもしょうがない。わたしはアルバロが好きなんだから。

「会えるのかな．．．アルバロにも。」

今が、ゲームでいうどの時期なのかはわからないが、わたしの望む世界なら、当然彼もミルス・クレアにいるはずだ。

「とりあえず、ミルス・クレアに行こう。」

「．．．でも、どうやって？」

「あれ、ゲームだと、ルルはどうやってミルス・クレアまで行ったんだっけ．．．。」

たしか、アミイが迎えに来て．．．

「わたしには、迎えの人、いないのかな．．．。」

ぐるっとあたりを見渡してみるが、ミルス・クレアの制服を着た人は見つからない。

「．．．そういえば、この世界に『ルル』は存在するのかな。」

『ルル』は、ゲームの主人公。

だから、もしかしたらわたしが『ルル』の立場、．．．いや、『ル

ル』自体ということもありえる。

「もしかしてわたし、ピンクの髪の少女だったりするのかな……。」

自分の姿を確認しようにも、鏡なんてないし、他に姿を映せそうなものも……。

「……あ。」

見つけた。

人ごみのむこうに、鏡ではなく、ピンクの髪の少女を。制服も着ているし、間違いない。

「ルルっ……。」

わたしは人ごみをかき分けながら、その少女へと近づく。

「あっ！」

しばらくして、彼女もわたしに気付いたようで、こちらに向かって歩き出した。

「あなたが、エアリね？ わたしはルル。あなたを迎えに来たの。」
そしてわたしの前にたどり着くと、彼女はそう言った。

ゲームでのアミーと同じように、ルルが学校まで案内してくれる。結構期待していたのだが、結局、途中でユリウスに会うこともなく、わたしは無事学校へとたどり着いた。

そしてわたしは今、学長室の扉の前にいる。

「この扉のむこうには、イヴァン先生とヴァニア先生が……。」
なんとなく、緊張してきた。

「大丈夫よ、エアリ。すごく良い先生たちだから。……ちょっと、個人的だけど。」

「うん。……ありがとう。」

ゲームでルルがアミーに励まされていたように、わたしもルルに励まされながら、扉をノックした。

「どうぞ、お入りなさい。」

ヴァニア先生の声。

「・・・失礼します。」

そして、扉を開く。

「わたし、寮で待つてるわね。」

扉を閉めるとき、ルルがそう言った。

「ようこそ、ミルス・クレアへ。」

そこには、思った通り、あの双子先生がいた。

「あたくしはヴァニア。ミルス・クレアの管理を担当しているの。」

「はじめまして。えっと・・・真乃　・・・じゃなかった、エアリです。・・・エアリ・マノ。よろしくお願ひします。」

「長旅で疲れたでしょう？なにせ、あの遠い東の島国、『ジパング』から来たのですから。」

「ジ、ジパング・・・？」

『ニホン』とか、『ジャパン』ではなくて、『ジパング』・・・。

・・・この世界のその『ジパング』という日本は、どんな国なのだろう。

きつと、わたしの世界の日本とは違っているのだと思う。

「留学生は珍しくはないが、まさか、あの『ジパング』からとはの。

あのあたりの国には、まだほとんど『魔法』というものは伝わっていないというのに・・・聞かされた時には驚いたわ。」

「あー・・・」

そうなんだ。

つまりわたしは、魔法のない国からやって来た留学生・・・

少し、ビラールに似ている。

「我輩はイヴァン。その派手なのと同様、ミルス・クレアの管理を任されておる。」

「はい。よろしくお願ひします。」

「あたくしたちは、あなたを歓迎しますわ。魔法を学ぶため、よく

遠いところからやって来てくれました。」

「・・・ありがとうございます。」

「クルツクー。」

イヴァン先生の杖の上で、パルーが鳴いた。

「パルムオクルスも、そなたを歓迎しておるようじゃ。」

「パルムオクルス・・・ええと、わたしもパルーって呼んでいいかな・・・？」

ルルがそうやって呼んでいたので、わたしもそっちのほう呼びやすい。

「チチチ・・・、ピチチチ・・・」

これはたぶん、いいってこと・・・なのだろう。

「ありがとうございます、パルー。」

「ホーホケキョー！」

・・・実際に見てみると、かなり不思議な鳥さんだ。ゲームでもそうだったけれど。

「それであなた・・・早速ですけど、魔法のことについて、どらくらいご存知？」

「え？ええと・・・」

「自分の『属性』は、わかるかしら？」

「えー？いいえっ・・・『属性』っていう意味はわかりますけど・・・。」

わたしの、属性・・・！？

「それでは、まず、調べないといけませんわね。」

「そうじゃな・・・ここでは場所がわるい。ちと、ついて参れ。」

「は、はいっ・・・」

わたしの、属性・・・。。
気になる。ものすごく。

わたしは一体、誰と一緒にの属性なんだろう。

「普段は儀式や学校を挙げての行事に使うホールなのですけれど、

少し大掛かりな魔法を使うときにも、この広さは便利ですよ。」

「・・・ここで、わたしの属性を調べるんですか？」

「そういうことじゃ。ではさっそく、はじめるとするかの。」

イヴァン先生が杖を構え、すつと目を閉じる。

その瞬間、ガラスとホールの空気が変わるのがわかった。

「古の地より来たれ、我が血族の祖よ。大気を満たす万物の祖よ。」

たぶんこれからイヴァン先生が行う魔法は、あの日ルルにむけて行ったものと同じものだ。

そしてルルの属性は『無属性』だった。

数十年に一度の、無属性。

わたしの属性は何なのだろう。

すごく、緊張する。

「我が求めしは、試練の罫。波紋の如く広がり、雲のように形なきもの。捕えしは、未熟な魂の輝き。」

聞いていて、これはなんとなくルル用の魔法っぽいなと思った。

『未熟な魂の輝き』とか、なんとなく、無属性だったころのルルっぽい。

でも今その言葉は、ルルではなくわたしにむけられたもの。

「いざ来たれ、審判の門よ！」

「っ・・・!？」

周囲を埋めつくす光に、思わず目を閉じる。

そして、次に目を開けると

「・・・魔法陣。」

ゲーム画面で見た光景と同じ。

ホールの床一面に、いくつもの魔法陣が浮かび上がっている。

そしてその中央にはひときわ大きな魔法陣・・・。

「さて・・・早速だが、そなたの資質を調べさせてもらおう。この魔法陣はその身に宿す魔力、そして属性によって反応を変えるものじゃ。さあ、エアリ。こちらへ。」

「・・・はい。」

「大丈夫よ、あなたはただ立っているだけで良いの。すぐ済みますから、安心なさい?」

ゲームでも、たしかこんな感じでヴァニア先生に励ましてもらった。「大丈夫、です。」

わたしは期待と緊張で溢れた胸を抑えながら、イヴァン先生に手招かれるまま、魔法陣の中へと足を踏み入れた、

「・・・贄は降り、審判の時は今来たれり。すべての存在に等しく与えられし色、彼の者の内に眠れる力を示せ!」

「・・・!!」

杖が床を突く音と共に、わたしは光に包まれた。

強い光。閉じたまぶたの奥まで容赦なく入り込むようなルルが言っていた、『ちりちりと肌が泡立つような感覚』。

まさにその通りだ。

身体の隅々にまで、光が入り込んでくる。

思わず、閉じたまぶたにぎゅっと力を込める。そのとき、

「え・・・」

光が、急に衰え始めた。

「まあ・・・、これは・・・」

「なんたることじゃ・・・」

目を開けると、すでにわたしの足元の魔法陣は消え去っていた。でも、先生たちのこの反応・・・。

まるで、ルルのときと同じ。

「ま、まさか、わたしも『無属性』・・・とか?」

わたしはおそろおそろたずねた。

だが、2人とも首を横に振る。

「属性はある。・・・あるのじゃが・・・」

「こんなの、きいたこともありませんわ。『無属性』ならまだ有り得る。でも・・・」

「あのっ・・・それって、どういう・・・」

緊張。そして期待。

わたしは期待していた。次に続く言葉を。
『無属性』よりも有り得ない。わたしの、属性。

「あなたの、属性は . . .」

わたしの、属性は . . .

ようこそ、ミルス・クレアへ（後書き）

に、二次創作って難しい・・・！
ほんと難しいですね。

そのキャラのこと、ちゃんとしっかり理解できてないと、
二次創作は無理ですね・・・。

わたし、ルルの性格とか正直良くわからないんですよね。
だって、ルートによって結構違ってたり・・・しません？？
でも、書き始めたからには頑張ります・・・！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7878y/>

Ring of Fortune

2011年11月27日02時47分発行